



# 〈新刊批評〉工場法と労働者問題(社會政策學會論叢第一冊)

關, 一

---

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 5(1):139\*-148

(Issue Date)

1908-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051285>



## 新刊批評

### 工場法ト労働者問題

(社會政策學會論叢第一冊)

#### (一)

社會政策學會ハ昨年十二月開催セル第一回大會記事ヲ輯メ『工場法ト労働問題』ト題シテ公刊セリ。其序言ニ曰ク

『社會政策學會論叢ハ社會政策上各種ノ問題ニ關スル會員ノ研究竝ニ會員外ノ學者先覺ノ意見ヲ收録シテ世ニ公ニシ我邦ニ於ケル社會政策ノ學理ト實際トノ進歩ニ貢獻センガ爲メ爾今隨時續刊セントスルモノナリ。……期スル所ハ獨逸社會政策學會ノ出版ニ係ル Schri-

fun des Vereins für Social politik 同ジキ使命ヲ盡シメントスルニアリ』……云々ト

以テ本論叢刊行ノ趣旨ヲ知ルニ足ラン。吾人ハ本論叢ガ異日獨逸社會政策學會論叢ト相並ビテ社會改良主義ニ貢獻シ社會政策ノ指南車タランコトヲ希望スルモノナリ。

同學會第一回大會ノ狀況ハ本誌(第四卷二號一四一頁以下)ニ於テ津村教授ノ詳說アルヲ以テ茲ニ再述ノ必要ヲ認メズ。今本論叢ヲ讀ムニ第一日工場法討議第二日講演ノ筆記ノ外ニ當日講演ノ時ヲ得ラレザリシ山崎博士外四氏ノ講演ヲ特ニ起稿掲載セルヲ以テ錦上添花ヲ添フルノ觀アリト雖ドモ。吾人ヲシテ望蜀ノ言ヲナサシメバ更ニ工場法ニ關スル報告者諸氏ノ詳細ナル調査報告ヲ公ニシ斯道ノ研究者ニ貴重ナル資料ヲ與ヘラレンコトヲ望マザルヲ得ズ。何トナレハ大會ノ報告タルヤ時間ノ制限ノ爲ニ報告者諸氏ハ其貴重ナル調査ノ一部ヲ割愛シテ報告セラレ

タルモノ多ク是等ノ割愛セラレタル調査ノ結果ハ學術上ノ研究ニ最モ裨益多キ所ナルヲ信ズレバナリ。

## (二)

本書ヲ通讀スルニ當リテ吾人ノ注意ヲ惹キタルモノハ(一)工場法ニ對スル反對論者ノ少キコト(二)從來本邦ニ行ハレタル雇主ト被傭主トノ主從關係ノ將來ニ關シ異說ノ少ナカラザルコト是ナリ。順次之ヲ述ベン。

工場法ノ制定ニ對シ世上尙異論多キハ否定シ難キノ事實ナリト雖ドモ、本會ニ於テ反對論ノ少數ナリシハ怪シムニ足ラズ。社會政策學會ノ標榜スル「現在ノ私有的經濟組織ヲ維持シ、其範圍内ニ於テ箇人ノ活動ト國家ノ權力トニ依テ階級ノ軋轢ヲ防ギ社會ノ調和ヲ期セン」ト欲セバ工場法ノ制定ハ大體ニ於テ何人モ拒ム能ハザル所ナリ。然レドモ其内容ニ至テハ會員諸氏ノ所見必ズシモ一致セザルモノ少ナカラザリシナラ

ンモ、本會ハ特別討議ヲナサバリシヲ以テ工場法其者ノ内容ニ關シテ何等ノ注目スベキ討論ヲ見ザリキ。

然レドモ工場法制定ノ反對論ハ絶無ニアラザリキ。則チ第二日ノ講演ニ於テ横井農學博士ハ側面ヨリ、小林法學士ハ正面ヨリ工場法不必要論ヲ唱ヘラレタリ。

横井博士ノ講演ハ(本書三一六、三一七頁)頗ル簡單ニシテ、時間切迫ノ爲ニ博士ノ趣旨ヲ十分ニ述ベラレザリシガ如シト雖ドモ、其反對ノ要點ハ略々次ノ如シ。

『今日ハ農業者ガ段々都會ニ行ツテ仕樣ガナイ世ノ中デアアル、ソレデ都會ノ勞働者ヲ保護サレタナラハ、益々農業者ガ逃ゲテ行ツテ仕舞フ、ソレデハ叶ハヌ、故ニ私ハ工場法杯ヲ拵ヘナイデ、ドウカ勞働者ライヂメテ貫ヒ度イ』則チ農本論ヨリ觀察シテ工場法ニ反對セントスルモノナリ。此種ノ反對論ハ甚ダ稀ニ見ル所

ニシテ、博士ノ意見ハ蓋シ多數ノ贊成者ヲ得ル能ハザル所ナラン。何トナレハ既ニ工場制ノ發生ヨリ生ズル勞働者ノ困難ヲ認識スルニ拘ラズ其保護ヲ勉メズシテ一層之ヲ困厄ノ地位ニ陷レントスルガ如キハ、經濟上ノ議論ハ暫ク措キ、人道上ヨリ排斥スベキ所ナレハナリ。故ニ博士ノ本意ハ農本論ノ主張ヲ助ケンガ爲ニ、工業勞働者ヲ一層困厄ノ地位ニ陷レテ工業國ノ自殺ヲ速ナラシメ、農業ノ神ノ救済ヲ待タシメントスルノ意ニアラズシテ、工業勞働者ト農業勞働者ト保護ヲ平等ナラシメントスルニ在ルヤ疑ヲ容レズ。然ラハ博士ハ却テ熱心ナル工場法制定論者ト認ムルモ不可ナキナリ。

次ニ小林法學士ノ反對論(二四八—二七五頁)ハ頗ル詳細ニ亘リテ、桑田博士ノ提出セラレタル工場法案ノ各條項ニ就テ一々反駁ヲ加ヘラレタリ。學士ノ主張ハ社會政策學會ニ於テ殆ンド全ク贊成者ヲ得ル能ハザルベシト雖ドモ、世上

多數ノ反對者ノ意見ヲ網羅セルモノニシテ、社會改良主義論者ガ最モ力ヲ盡シテ爭フベキ論點ハ茲ニ存スト云フベシ。吾人ハ贅長ヲ厭ハズ、學士ノ論旨ヲ述ベント欲ス。

氏ノ論旨ヲ解析スレバ左ノ數點ニ歸着ス

(一)歐米諸國ニ於ケル工場法ハ政治上ノ權力爭奪ノ結果トシテ制定セラレタルモノニ過ギズシテ、之ヲ本邦ニ應用セントスルハ不消化ナル學者ノ「テーブル」論ナリ。

(二)本邦ニハ固有ノ大和民族ノ性格アリ、何ヲ苦ンデ工場法ヲ制定スルノ必要アラン。

(三)現今工場ノ設備ハ職工ノ住居ヨリモ遙ニ健康ニ可ナリ、工場法ニ依リテ工場ノ設備ヲ取締マルノ必要ナシ。

(四)本邦ノ現狀ニ照セバ「廉イ勞力ヲ利用シテ勞力ノ效果ヲ大ナラシメテ」外國ニ對抗スルノ必要多シ、故ニ勞働時間ヲ制限シ怠惰ノ風ヲ助長スルハ不可ナリ。

(五)幼年者ノ工場勞働禁止ハ却テ幼年者ヲ惡風ニ感染セシムベシ。

是等ノ論旨ハ氏ノ創見ニアラズシテ、本邦ノ實業家中工場法ニ反對スルモノ、主張スル所ナリ。今一例トシテ明治三十五年十二月臨時商業會議所聯合會議事速記録中ヨリ、某實業家ノ意見ヲ摘録セン。(東京商業會議所報告報外工場法案調査資料二五—二九頁)

「職工徒弟ノ十一歳未満ノ者ヲ使フコトヲ禁止スルト云フヤウナコトハ——實際ヲ知ラヌ空論デアル——決シテ十一歳未満ノ職工ヲ使フト云フノハ使手ノ方ニモソシナニ苦勞シテ使フト云フ意味ヨリハ寧ロ親ニ附イテ來ルトカ或ハ姉ニ附イテ來ルト云フヤウナノガ能ク紡績ナドニアルノデアル、是等ハモウ唯一人ソシナ子供ヲ家ニ置クコトハ出來ナイノデアルカラ母親カ或ハ姉ニ附イテ來テ居ル、云々而シテソレ等ハ實際ニ於テソレデ衛生ニ非常

ニ害ガアツテ其身體ノ發育ヲ害スルカト云フ  
ナラバサウデナイ寧ロ家ニ居ルヨリハ其方ニ  
來テ居ル方ガ衛生ニ宜イ云々

又同會ニ於ケル他ノ論者ノ主張次ノ如シ(三〇  
—三一頁)

「職工其者ノ生活ノ度合ヨリハ工場ノ方ガ遙ニ  
優ツテ居ルト云フヤウナコトデ」云々

ト云フ如キ、今小林學士社會政策學會ニ於ケル  
講演ト比較シ來レバ、其主張恰モ符節ヲ合スル  
ガ如キノ感ナクンハアラズ。故ニ是等ノ意見ハ  
我國ニ於テ多數ノ贊成者ヲ有スルコト明白ナリ  
然レドモ吾人ノ見ル所ハ稍之ニ異リ、工場法ノ  
制定ヲ以テ本邦工業ノ發達上ノ急務トナスモノ  
ニシテ、今其詳細ヲ縷述スル能ハズト雖ドモ其  
大要次ノ如シ。

(一) 歐米諸國ニ於ケル工場法ノ制定ハ政權爭  
奪ノ結果ナリトスルモ、ソハ工場法其物ノ  
價值ヲ左右スルニ足ラズ。小林學士ガ歐米

工場法ハ政權爭奪ノ結果トシテ制定セラレ  
タルモノナレバ、本邦ニ移入スベカラズト  
云フハ、公平冷靜ナル觀察ト云フベカラズ  
若シ此論鋒ヲ以テスレバ歐米諸國ノ法律制  
度ハ凡テ本邦ニ採用スル能ハザルベク、立  
憲政體其物モ政權爭奪ノ結果ニシテ、其採  
用ハ本邦ノ進連ヲ害スルモノト云ハザルベ  
カラズ。且ツ現時ノ立憲政體ノ下ニ如何ナ  
ル經濟問題モ政治上ノ問題タラザルナシ。  
工場法ガ歐米諸國ニ於テ政治上ノ問題トナ  
リシハ、今更事新シク之ヲ聞クヲ要セズ。  
工場法其物ガ工業ノ發達上ニ必要ナリトセ  
バ、歐米諸國ノ工場法制定當時ノ事情ノ如  
キ暫ク等閑視スルモ不可ナキナリ。

(二) 本邦ニハ大和民族固有ノ性格アルヲ以テ  
歐米ヲ模倣スルヲ要セズトノ論ハ、最モ俗  
事ニ入り易キ所ナレドモ、平島東京高等工  
業學校長ノ講演ハ之ヲ論駁シテ餘蘊ナキヲ

信ズ(本書二七七頁)ルノミナラズ、後段主從關係ノ關係ヲ述ブルニ當リ之ヲ詳論スルヲ以テ茲ニハ省略スベシ。

(三)工場ノ設備ガ職工ノ居住ヨリモ衛生上労働者ニ利益アルヲ以テ、國家ガ法律ヲ以テ工場設備ニ干涉スルヲ非難スルノ論ハ、屢々吾人ノ耳ニスル所ナレドモ、横手醫學博士ノ講演(本書一九六一—二四頁)ハ、工場内ノ生活ガ労働者ノ健康上ニ及ボス影響ヲ明カニスルヲ得ベク、工場設備ノ不完全ナルガ爲ニ種々ノ災厄ヲ生ズルノ事例ハ、農商務省ノ調査ニ係ル工場衛生及災害統計表ノ示ス所ニ依ルモ明白ナリ。然ラハ國家ガ工場ノ設備ニ干涉スルハ其當然ノ任務ニシテ工業者ニ放任スルモ設備ヲ改良スベシトノ說ハ、上述ノ事實ヲ無視セル暴論ト云ハザルベカラズ。且ツ職工ノ住宅ガタトヘ幾分カ衛生上ノ缺點アリトスルモ、労働者ガ一

日十數四五時間單調無味ナル労働ニ從事スルニ比スレバ、九尺二間ノ陋屋内ニ於テモ相當ノ休息時間ヲ得ルヲ以テ労働者ノ身體上精神上利益多キヲ信ズ。況ンヤ工場法ノ制定ハ労働者住居ノ改良其慰安休息ノ設備ト相容レザルコトナキニ於テヲヤ。

(四)本邦ニ於テ労働時間ノ制限ヲ不必要トスルモ、實際ニ通ゼザル議論ト云ハザルベカラズ。農商務省ノ調査統計表ハ労働時間十七時間ニ上ル工場アルヲ示スニアラズヤ、論者ハ斯ノ如キ工場ヲモ自由ニ放任シテ可ナリト認ムルヤ、且ツ斯ノ如キ長キ労働時間ガ労働ノ效程ヲ減少スルハ、學者ノ定論ナルノミナラズ、諏訪其他ノ製絲工場ニ於テ、工女ガ夏期七八月以後ニ於テ、終日座業ニ從事スルガ爲ニ、消化器病、子宮病患者ノ著シク増加スルハ、吾人ノ屢々聞ク所ナリ。然ラハ労働時間ノ制限ハ、目前ノ利

益ニ驅ラル、モノ、外、其必要ヲ否定スル能ハザル所ニシテ、小林學士ノ主張セラルル如ク、我國工業ヲ歐米諸國ニ對抗セシメンニハ、勞働時間ノ制限、夜業ノ休止ニ依リテ、勞働者ノ身體上精神上ノ發達ヲ健全ナラシメ、勞働效程ヲ増加スルハ、目下ノ急務ト云ハザルベカラズ。由來我國工業ノ短所ハ、勞働者ガ勞働時間内熱心ニ勞働ニ從事セズシテ勞働效程ノ少キニ存ス。斯ノ如キハ一日十七時間ノ勞働ニ於テ免カルベカラザル所ニシテ、勞働時間ノ甚シク長キモノニ制限ヲ加フルハ、工業發達上ノ最大急務ト云フベキナリ。

(五)幼年工ノ勞働禁止ニ反對セラレタル學士ノ論旨ハ、了解ニ苦シムノ點ナキニアラズト雖ドモ、要ハ幼年者ガ勞働ニ從事セザル時ハ、却テ惡風ニ感染スベシト云フニアルガ如シ、此非難ハ一應理ナキニアラズト雖

ドモ、學士ハ何故ニ工場法ヲ制定シ、幼年工ノ工場勞働ヲ禁ズルト同時ニ、義務教育ヲ勵行シ又獨逸其他ニ行ハル、保育所ノ設備ヲナスコトヲ主張セラレザリシヤ怪マザルヲ得ズ。學士ガ「我國ニ於テハ其處迄手ガ届キ兼テ」トナスハ退嬰的保守的ノ議論ト認メザルヲ得ザルナリ。吾人ハ工場法ノ制定ヲ以テ社會改良策ノ第一着步トナスニ過ギズシテ、工場法ノ制定ハ他ノ改良策ト相待テテ社會改良ノ目的ヲ達スベキハ論ヲ俟タザルナリ。

要之小林學士ノ工場法ニ對スル詳細ナル反對論ハ、殆ド全ク吾人ノ贊同スル能ハザル所ナリ。

### (三)

社會政策學會大會ノ討議ハ、工場法其物ニ關スル討議ト云ハンヨリモ、一層廣キ勞働者問題ノ討議ト云フヲ正當トス。何トナレバ第一日ノ討議中、最モ注目ヲ要スベキ問題ハ、工場法制

定ノ當否ニアラズシテ、雇主ト被傭者間ノ主從關係ノ將來ニ關シテ、學界ノ先覺者間ニ一大論戰ヲ開キタルヲ以テナリ。

此點ニ關シ、先ヅ論戰ヲ開キタルハ、余ノ恩師タル添田博士ナリ。博士ハ曰ク

『此日本ニ存スルコロノ舊來ノ美風、是ハ封建ノ餘弊デナイ封建ノ恩澤デアル所ノ主從ノ關係——使ハレル者ト使フ者トノ間ニ存スル相敬愛スルノ觀念即チ上ハ下ヲ憐ミ下ハ上ヲ敬フト云フ此美風ヲ此勞力ト資本トノ調和ニ加味スル問題ハ大ニ趣味アル問題デナイカト信ズル』云々ト

然ルニ之ニ次デ福田、高野、小野塚ノ三博士ハ主從關係ノ到底將來ニ維持スベカラザルヲ論ジテ、添田博士ノ說ヲ駁シケレバ、博士ハ更ニ登壇シテ其主張ヲ説明セラレ、當日ノ討論ニ一大活氣ヲ添ヘタリ。且ツ本論叢ニハ關口學士ノ起稿ニ係ル一論文ヲ追録シ、添田博士ノ主從說ニ

賛成ヲ表セラレタルモノアリ。此問題ハ上述ノ如ク直接工場法ニ關スルモノニアラズト雖ドモ労働者問題解決ノ思潮トシテ、最モ注目ヲ要スベキ大問題タルヲ失ハズ。社會政策學會ノ討論ガ、端ナク此ノ問題ニ觸レテ論戰ヲ生ジ、名士ノ所說ヲ窺フヲ得タルハ吾人ノ至幸ト云フベキナリ。

余ハ茲ニ兩論者ノ論旨ヲ詳細ニ比較シテ、其價值ヲ批判スルノ遑ヲ有セズト雖ドモ、余ハ不幸ニシテ恩師タル添田博士ト少シク見ル所ヲ異ニシ、將來長ク主從關係ノ維持シ能ハザルヲ信ジ、労働者問題ノ解決ハ主從關係ノ維持ニ依頼スル能ハザルヲ認ムルモノナリ。思フニ、吾人ハ物質的史觀論ニアラズト雖ドモ、或程度迄ハ新シキ生産組織ガ新シキ社會制度ニ伴フヲ要スルノミナラズ、新シキ心理狀態新シキ道德觀念ヲ惹起スハ否定シ難キ所ナリト信ズ、故ニ工場制ヲ本邦ニ移入セズンハ則チ已ム。若シ工場制

ニ依リテ國民經濟ノ發展ヲ圖ラント欲セバ、之ニ適應スル心理狀態ノ發生ヲ避クル能ハザルベシ。換言スレバ往時ノ主從關係ニ基ヅキタル「精神情誼」ノ長ク維持シ難キハ喋々ヲ要セザル所ナルベシ。吾人ハ此思潮ニ基ヅキ我親族法上ノ根本原則タル「家」ノ制度ガ果シテ能ク永久ニ簡人本位ノ思想ニ抵抗シ得ベキヤヲ疑フモノナリ勿論物質的史觀論者ガ一定ノ生産組織ハ一定ノ社會組織ヲ要ストナスハ、極端論ニシテ、人種ノ異同、國民性ノ相違ガ、各國ノ一律ナル發展ヲ許ス能ハズシテ、本邦將來ノ經濟上ノ發展ト國民性格トノ關係ヲ講究スルコトガ、我經濟學者ノ任務タルベキハ、添田博士ノ指示セラレタルガ如シト雖ドモ、所謂 Patriarchalism ニ依リテ勞働者問題ヲ解決スベキ最後ノ斷案トナスニ至テハ、容易ニ首肯シ得ザル所ナリ。今最も簡短ニ其所以ヲ述ベシ。

顧フニ、十九世紀ニ及ビテ勞働者問題ノ起リ

タル所以ハ、機械ノ發明、科學ノ應用、貧富ノ懸隔ノ原因ニ在ルハ論ヲ俟タスト雖ドモ。勞働者ノ自覺モ勞働者問題發生ノ最大原因タラズンバアラズ。サレバ、一部ノ人士ガ十九世紀ニ至リテ、勞銀ガ著シク上騰シ、勞働者ノ地位ガ往時ノ農民手工業者ニ比シテ遙ニ改良セラレタルニ拘ラズ、其不平ヲ訴フルノ聲高キヲ以テ、勞働者ノ貪婪飽クナキノ罪ニ歸セントスルハ、抑々誤レリト云ハザルベカラズ。勞働者ガ如何ニ抑壓セララル、モ、如何ニ窮乏スルモ、階級的關係、主從的關係ニ満足スルニ當リテハ、決シテ勞働者問題ノ發生ヲ見ル能ハズ。然ルニ近世ノ政治上社會上ノ變動ガ、箇人平等ノ觀念ヲ惹起スニ及ビテ、茲ニ始メテ統一アル節制アル工場制ノ發展トナリ、勞働者問題モ亦茲ニ其萌芽ヲ見ル、勞働者ハ勞働ニ從事スル工場内ニ於テ嚴格ナル規律ニ服スルモ、工場外ニ於テ自由ナル人格ヲ有シ、賃銀ト勞働條件ニ關シテハ自由意

志ニ從テ活動シ、自由契約ノ下ニ勞働ニ服スルニ過ギザルナリ。此時ニ當リ曩日ノ封建ノ美風(?)タル主従關係ノ精神ヲ復活シ、家長ト家族親方ト職人トノ關係ヲ以テ、現時ノ傭者被傭者ノ關係ヲ處セントスルハ、桎梏相容レザルモノニシテ、立憲政體ノ缺點ニ苦シミテ、往時階級政治專制政體ヲ復活セントスルモノト異ナラザルナリ。吾人ハ工場制ノ弊害ヲ認メ、自由契約勞働ノ制度ニ伴ヒタル幾多ノ缺點ヲ認ムト雖ドモ、其根本義タル對等ノ自由契約關係ヲ廢止シテ、上ヲ敬シ下ヲ憐ム「パトリアーカリスムス」ニ復歸スルノ不利ヲ主張シ、主従關係ノ復活ハ工業發展ノ趨勢ニ反スルモノト信ズルモノ也。然レドモ。添田博士ガ工場法ノ制定ヲ必要ト認メラルハ、ニ依リテ想察スルニ、決シテ主従關係ノミヲ以テ、勞働者問題ヲ解決セントスルモノニアラザルハ明白ニシテ、所謂「パトリアーカリスムス」ヲ主張スル一派ノ論者ト同一視ス

ベキニアラズ、唯々主従關係ガ幾分カ勞働者問題解決ヲ促進スベキヲ認メラルハ、ニ過ギズシテ工場主モ克ク上述ノ變遷ノ避クベカラザルヲ會得シ、新生產組織ニ適應スベキ新制度ノ發生ヲ助長スルト同時ニ、勞働者慰安ノ設備(Vohla-Intschrinungen)ニ力ヲ盡シ、歐米ニ於ケル初期ノ同盟罷工ノ慘劇ヲ見ズシテ、新時代ニ入ルヲ得ベシトノ說ヲ主張セラルハ、モノナリトセハ兩論者ノ立脚點ハ、必ズシモ調和シ難キモノト云フ能ハザルベシ。(關生)